

## 本邦における悪性喉頭腫瘍剖検例の統計的観察

村田 厚 藤沢 容子 野田 三重子  
守田 裕啓 佐藤 方信

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座 (主任: 鈴木鍾美教授)

[受付: 1980年9月17日]

抄録: 日本人における悪性喉頭腫瘍の実態の一部を解明する目的で、日本病理剖検輯報第15~第19輯をもとに過去5年間の悪性喉頭腫瘍の剖検例を集計し、統計的に観察した。

この期間における悪性喉頭腫瘍は363例(男性326例, 女性35例, 性別不明2例)みられ, その性差は9.3:1となり男性が圧倒的に多かった。組織学的分類では扁平上皮癌が318例と全症例の大半を占めていた。剖検時の年齢別分布では男女あわせて60歳代が144例と最も多く, また, その平均年齢は65.0歳(男性64.8歳, 女性66.5歳)であった。転移の頻度に関しては, 臓器部位別では肺に転移のみられた症例が119例と最も多く, 次いで頸部, 食道, 甲状腺の順に転移がみられた。リンパ節転移では頸部リンパ節に転移していた症例が77例と最も多く, 次いで気管周囲, 肺門部の順であった。また, 悪性喉頭腫瘍と他部位原発癌との重複癌が65例(二重癌60例, 三重癌5例)みられた。

## 結 言

悪性喉頭腫瘍の発生頻度は, 全人癌の2%よりは多くない<sup>1)</sup>といわれ, 性別的には男性が女性より圧倒的に多いというのは世界各国全く共通した現象といえる。近年(1972年~1976年)における厚生省の統計によれば, わが国の喉頭癌患者数は顕著な増加はみられない<sup>2)</sup>こと, と同時に他の臓器癌よりも治癒率が高い<sup>3)</sup>ことが指摘されている。しかし, わが国で悪性腫瘍発生率の第2位の座にある肺癌に近い将来に現在発生率第一位の胃癌にとってかわるであろう<sup>4)</sup>ともいわれ, 呼吸器における悪性腫瘍はますます重要な位置を占めつつある。そして食事, 嗜好物, とくに煙草の問題と呼吸器系の悪性腫瘍との関係は医師をはじめ多くの人達に過大な不

安を与えているのが現状である。そこで著者らはわが国における人悪性喉頭腫瘍の実態の一端を解明すべく, 日本病理剖検輯報をもとに悪性喉頭腫瘍の剖検例を集計し, 種々の角度から若干の統計的観察を行ったのでその結果を報告する。

## 材料および方法

材料は日本病理剖検輯報<sup>5)</sup>(以下輯報と略)第15輯, 16輯, 17輯, 18輯, 19輯(1972~1976年)から集計した過去5年間の本邦における喉頭原発の悪性腫瘍剖検例363例である。

## 成 績

1. 悪性喉頭腫瘍剖検例の年度別推移(表1)。

A statistical survey of the autopsy cases of malignant laryngeal tumor in Japan.

Atsushi MURATA, Yohko FUJISAWA, Mieko NODA, Hiroaki MORITA and Masanobu SATOH

(Department of Oral Pathology, School of Dentistry, Iwate Medical University, Morioka)

\*盛岡市内丸19番1号(〒020)

Dent. J. Iwate Med. Univ. 5 : 127-135, 1980

表1 悪性喉頭腫瘍剖検例の年度別推移

年 度	性	剖 検 数 (A)	全腫瘍剖検数 (C)	悪性喉頭腫瘍剖検数 (L)	L/A×100(%)	L/C×100(%)
1972	男	13,567	7,181	76	0.56	1.06
	女	9,059	4,916	9	0.10	0.18
	不明	91	36			
	計	22,717	12,133	85	0.37	0.70
1973	男	13,899	7,581	49	0.35	0.65
	女	9,454	5,035	5	0.05	0.10
	不明	131	36	1		
	計	23,484	12,652	55	0.23	0.43
1974	男	13,774	7,608	65	0.47	0.85
	女	9,061	4,707	8	0.09	0.17
	不明	141	45			
	計	22,976	12,360	73	0.32	0.59
1975	男	13,481	7,704	61	0.45	0.79
	女	9,137	4,857	4	0.04	0.08
	不明	150	61	1		
	計	22,768	12,622	66	0.29	0.52
1976	男	14,497	8,421	75	0.52	0.89
	女	9,441	5,124	9	0.10	0.18
	不明	187	65			
	計	24,125	13,610	84	0.35	0.62
合 計	男	69,218	38,495	326	0.47	0.85
	女	46,152	24,639	35	0.08	0.14
	不明	700	243	2		
	計	116,070	63,377	363	0.31	0.57

全国の大学および主要病院で行われた過去5年間(1972~1976年)の剖検例の総数は116,070例で、腫瘍剖検例総数は63,377例であった。このうち喉頭悪性腫瘍の剖検数は363例で、剖検総数に対して0.31%、全腫瘍剖検数に対して0.57%であった。性別不明の2例を除いた喉頭悪性腫瘍の剖検数計361例を性別にみると男性が326例(90.3%)、女性が35例(9.7%)と男性の症例数が圧倒的に多く、女性の9.3倍であった。

年度別にこれらの症例数をみると各年それぞれ85例、55例、73例、66例、84例であった。これらの各年度における症例数は各年度における剖検総数に対してそれぞれ0.37%、0.23%、0.32%、0.29%、0.35%を示し、また各年度における腫瘍剖検総数に対してそれぞれ0.70%、

0.43%、0.59%、0.52%、0.62%を示めており、これらの各年度における症例数については顕著な増減の傾向はみられなかった。

## 2. 悪性喉頭腫瘍剖検例の年代別症例数と平均年齢(表2)

性別不明の2例を除いた計361例の悪性喉頭腫瘍について年代別にそれぞれの症例数をみると、60歳代で死亡したものが144例(39.9%)と最も多く、次いで70歳代108例(29.9%)、50歳代54例(15.0%)、40歳代28例(7.8%)、80歳代20例(5.5%)の順であった。また剖検時の平均年齢は65.0歳(男性64.8歳、女性66.5歳)であった。

## 3. 悪性喉頭腫瘍剖検例の組織学的分類と原発部位(表2, 3)

組織型の不明な37例を除いた計326症例の悪

表 2 悪性喉頭腫瘍剖検例の組織像別にみた年代分布

年 代	0-9	10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	80-89	90-	不 明	計(%)	
扁平上皮癌	男女			1	3	21	41	120	85	13	1	2	287
	不明					2	7	9	9	2			29
	計			1	3	23	48	131	94	15	1	2	318(97.6)
未分化癌	男女							1					1
	不明						1						1
	計						1	1					2(0.6)
その他	男女				1	1	2		2				6
	不明												
	計				1	1	2		2				6(1.8)
記載なし	男女					4	3	10	9	5	1		32
	不明							3	2				5
	計					4	3	13	11	5	1		37
計 (%)	男			1 (0.3)	4 (1.2)	26 (8.0)	46 (14.2)	130 (40.1)	97 (29.9)	18 (5.6)	2 (0.6)	2	326(90.3)
	女					2 (5.7)	8 (22.9)	12 (34.3)	11 (31.4)	2 (5.7)			35(9.7)
	不明							2				2	
計			1 (0.3)	4 (1.1)	38 (7.8)	54 (15.0)	144 (39.9)	108 (29.9)	20 (5.5)	2 (0.5)	2	363	

注：年齢および性に関する（ ）内％は、年齢および性に関する記載のない2症例を除いた361例を、組織型に関する（ ）内％は、組織型に関する記載のない37症例を除いた326例をそれぞれの総数として計算したものである。

表 3 悪性喉頭腫瘍剖検例の原発部位別症例数と平均年齢

原発部位	男	女	計 (%)	平均年齢(才)
声門上部	8	4	12(48.0)	60.3
声門部	11		11(44.0)	67.2
声門下部	2		2(8.0)	79.5

性喉頭腫瘍について、それぞれの症例数をみると(表2)、扁平上皮癌が318例(97.6%)で全症例の大半を占めており、ついで未分化癌が2例(0.6%)で、その他多形細胞肉腫、基底細胞癌、単純癌、腺様嚢胞癌、粘表皮癌および硬癌が各1例ずつみられた。

輯報に悪性喉頭腫瘍の原発部位について記載のあった症例は25例であった(表3)。これら

の症例を原発部位別にそれぞれの症例数をみると、声門上部が12例(48.0%)と最も多く、声門部が11例(44.0%)と比較的多数を占めていたが、声門下部は2例(8.0%)と少なかった。また原発部位別にその死亡時の平均年齢をみると声門上部が60.3歳と最も若く、次いで声門部の67.2歳であり、声門下部は症例が少なく明確な数値とはいえないが79.5歳と最も高齢を示していた。

4. 悪性喉頭腫瘍剖検例の転移頻度(表4, 5, 6)

悪性喉頭腫瘍剖検総数363例中輯報に転移の記載のない症例43例を除いた計320例中に、臓器またはリンパ節への転移がみられたものは248例(77.5%)であった。またこれらの転移

表4 悪性喉頭腫瘍剖検例の転移の頻度

年 代	性	臓 器	リンパ節	臓器+リンパ節	転 移 な し	記 載 な し	計 (合計)
0 - 9	男 女						
10 - 19	男 女						
20 - 29	男 女			1			1 (1)
30 - 39	男 女	1		3			4 (4)
40 - 49	男 女	7 2	1	13	3	2	26 2 (28)
50 - 59	男 女	13 3	3	19 2	6 3	5	46 8 (54)
60 - 69	男 女	35	9	44 不明 7 1	26 4	16 不明 1 1	130 不明 12 2 (144)
70 - 79	男 女	24 3	6	35 4	21 4	11	97 11 (108)
80 - 89	男 女	6 1	1	3	4 1	4	18 2 (20)
90 -	男 女					2	2 (2)
不 明	男 女	1				1	2 (2)
計	男 女 不明	87 9	20	118 13 1	60 12	41 1 1	326 35 2
合 計 (%)		96 (30.0)	20 (6.2)	132 (41.3)	72 (22.5)	43	363

注：転移に関する（ ）内％は、転移に関する記載のない43症例を除いた計320例を総数として計算したものである。なお、年齢に関する（ ）内％は表2の注に示したものと同様である。

症例数を性別的に比較すると男性では285例中225例(78.9%)、女性では34例中22例(64.7%)であった。これらの転移症例のうち、臓器とリンパ節のいずれにも転移を認めた症例が320例中132例(41.3%)、臓器のみに転移がみられた症例は320例中96例(30.0%)といずれも比較的高い値を示していたが、リンパ節にのみ転移がみられた症例は320例中20例(6.2%)に過ぎなかった。臓器に転移のみみられた症例計228例について臓器別にそれぞれの症例数

を検索すると(表5)、肺の119例(52.2%)が最も多く、以下頸部の68例(29.8%)、食道の63例(27.6%)、甲状腺の54例(23.7%)、肝の44例(19.3%)、気管の37例(16.2%)、腎の29例(12.7%)、胸膜の27例(11.8%)、舌の20例(8.8%)の順で転移が認められた。リンパ節に転移のみみられた症例計152例について部位別にみたそれぞれの症例数(表6)は頸部リンパ節が77例(50.7%)と最も多く、以下、気管周囲リンパ節の46例(30.3%)、肺門

表5 悪性喉頭腫瘍剖検例における臓器別転移症例数

臓器	男 (%)	女 (%)	計 (%)
肺	105 (51.2)	14 (63.6)	119 (52.2)
頸部	61 (29.8)	6 (27.3)	68*(29.8)
食道	53 (25.9)	10 (45.5)	63 (27.6)
甲状腺	50 (24.4)	4 (18.2)	54 (23.7)
肝	41 (20.0)	3 (13.6)	44 (19.3)
気管	35 (17.1)	2 (9.1)	37 (16.2)
腎	28 (13.7)	1 (4.6)	29 (12.7)
胸膜	26 (12.7)	1 (4.6)	27 (11.8)
舌	18 (8.8)	2 (9.1)	20 (8.8)
副腎	17 (8.3)		17 (7.5)
心	11 (5.4)	1 (4.6)	12 (5.3)
横隔膜	11 (5.4)		11 (4.8)
咽頭	10 (4.9)	1 (4.6)	11 (4.8)
皮膚	10 (4.9)	1 (4.6)	11 (4.8)
動脈	8 (3.9)	2 (9.1)	10 (4.4)
心嚢	10 (4.9)		10 (4.4)
縦隔	10 (4.9)		10 (4.4)
頸椎	7 (3.4)	2 (9.1)	9 (3.9)
胸骨	9 (4.4)		9 (3.9)
脾	7 (3.4)	1 (4.6)	8 (3.5)
脊椎	7 (3.4)	1 (4.6)	8 (3.5)
腹膜	7 (3.4)		7 (3.0)
骨	7 (3.4)		7 (3.0)
胸椎	6 (2.9)		6 (2.6)
脾	5 (2.4)	1 (4.6)	6 (2.6)
唾液腺	5 (2.4)		5 (2.2)
扁桃	4 (2.0)	1 (4.6)	5 (2.2)
肋膜	5 (2.4)		5 (2.2)
肋骨	5 (2.4)		5 (2.2)
骨髓	5 (2.4)		5 (2.2)
腸	4 (2.0)		4 (1.8)
髓膜	4 (2.0)		4 (1.8)
脳	3 (1.5)		3 (1.3)
頭蓋骨	3 (1.5)		3 (1.3)
胃	3 (1.5)		3 (1.3)
腰椎	3 (1.5)		3 (1.3)
口腔	2 (1.0)		2 (0.9)
底	2 (1.0)		2 (0.9)
経	2 (1.0)		2 (0.9)
神	2 (1.0)		2 (0.9)
その他	11 (5.4)		11 (4.8)

\* : 性別不明の1症例を含む。

部リンパ節の44例 (30.0%) の順に少なくなり, その他気管分岐部リンパ節, 静脈角リンパ節, 腋窩リンパ節などにも転移している症例が認められた。

表6 悪性喉頭腫瘍剖検例におけるリンパ節転移の部位別症例数

リンパ節	男 (%)	女 (%)	計 (%)
頸部	70 (50.7)	6 (46.2)	77*(50.7)
気管周囲	45 (32.6)	1 (7.7)	46 (30.3)
肺門	41 (29.7)	3 (23.1)	44 (30.0)
気管分岐部	16 (11.6)	3 (23.1)	19 (12.5)
静脈角	16 (11.6)	2 (15.4)	18 (11.8)
縦隔	12 (8.7)	1 (7.7)	14*(9.2)
腋窩	13 (9.4)		13 (8.6)
鎖骨上窩	11 (8.0)	1 (7.7)	12 (7.9)
後腹膜	12 (8.7)		12 (7.9)
傍脾	9 (6.5)	1 (7.7)	10 (6.6)
傍大動脈	7 (5.1)	1 (7.7)	8 (5.3)
傍胃	8 (5.8)		8 (5.3)
肝門	7 (5.1)		7 (4.6)
鎖骨下窩	5 (3.6)	1 (7.7)	6 (4.0)
腸間膜	3 (2.2)		3 (2.0)
傍食道	3 (2.2)		3 (2.0)
その他	4 (2.9)		4 (2.6)

\* 性別不明の1症例を含む。

5. 悪性喉頭腫瘍剖検例における他臓器との重複癌について (表7, 8)

重複癌の症例は悪性喉頭腫瘍剖検総数 363例中65例 (17.9%) で, その平均年齢は78.4歳と比較的高齢であった。このうち悪性喉頭腫瘍と他の一部位の原発癌との二重癌症例 (表7) は60例と全症例の16.5%であった。これら二重癌60例における重複原発臓器癌の種類とそれぞれの症例数は胃癌の17例 (28.3%) が最も多く, 次いで肺癌が14例 (23.2%), 食道癌, 膀胱癌がそれぞれ5例 (8.3%) の順であった。

悪性喉頭腫瘍と他の二部位の原発癌との三重癌症例 (表8) は5例みられたが, いずれも男性例であった。三重癌の剖検例の平均年齢は72.8歳であった。これら三重癌における重複臓器原発癌の種類別重複状態は, 各症例それぞれ異っており, それぞれ肺癌および胃癌, 肺癌および食道癌, 胃癌および食道癌, 扁桃癌および食道癌, 膀胱癌および直腸癌などとの重複を示していた。

性別的にこれらの重複癌の発生率を比較すると男性では症例総数 326例中58例 (17.8%),

表7 悪性喉頭腫瘍剖検例における重複癌の臓器別症例数

臓器	舌	口腔底	食道	肺	胃	肝	脾	膀胱	前立腺	胆のう	胆道	腎	結腸	直腸	子宮	白血病	計
男	1	2	5	13	14	3	3	5	3	1	1	1		1		1	53
女				1	3								1		1		7
計 (%)	1 (1.7)	2 (3.3)	5 (8.3)	14 (23.2)	17 (28.3)	3 (5.0)	3 (5.0)	5 (8.3)	3 (5.0)	1 (1.7)	1 (1.7)	1 (1.7)	1 (1.7)	1 (1.7)	1 (1.7)	1 (1.7)	60

表8 三重癌症例の重複臓器

男	60才	喉頭癌・肺癌・胃癌
男	84才	喉頭癌・肺癌・食道癌
男	69才	喉頭癌・胃癌・食道癌
男	70才	喉頭癌・扁桃癌・食道癌
男	81才	喉頭癌・膀胱癌・直腸癌

表9 悪性喉頭腫瘍剖検例における副病変別症例数

疾患名	男 (%)	女 (%)	計 (%)
肺炎	140 (42.9)	12 (34.3)	153* (42.1)
肺動脈血および肺水腫	39 (12.0)	2 (5.7)	42* (11.6)
動脈硬化	33 (10.1)	5 (14.3)	38 (10.5)
心肥大	31 (9.5)	5 (14.3)	36 (9.9)
腔水症	32 (9.8)	2 (5.7)	34 (9.4)
結核	26 (8.0)	5 (14.3)	31 (8.5)
胃潰瘍	25 (7.7)	2 (5.7)	27 (7.4)
悪液質	21 (6.4)	2 (5.7)	23 (6.3)
頸部血管破裂	21 (6.4)	1 (2.9)	22 (6.1)
肝動脈血	16 (4.9)	3 (8.6)	19 (5.2)
気管支炎	17 (5.2)	1 (2.9)	18 (5.0)

\* 性不明の1症例を含む。

女性では症例総数35例中7例(20.0%)となり、女性における重複癌症例の占める割合が男性におけるそれよりもやや高かった。

#### 6. 悪性喉頭腫瘍剖検例における副病変 (表9)

副病変としては肺炎が最も多くの症例(153例, 42.1%)でみられ、次いで肺動脈血および肺水腫が42例(11.6%)、気管支炎が18例(5.0%)でみられるなど呼吸器系の病変が目立った。その他動脈硬化症38例(10.5%)、心肥大36例(9.9%)、腔水症34例(9.4%)、結核

31例(8.5%)、胃潰瘍27例(7.4%)などがみられ、とくに今回の調査において頸部血管破裂が22例もみられたことは注目すべき所見であった。

## 考 察

### 1. 悪性喉頭腫瘍剖検例の年度別推移

悪性喉頭腫瘍剖検例は1972年から1976年までの5年間に363例みられたが、各年度における症例数はそれぞれ85例, 55例, 73例, 66例, 84例となり、これらの間に多少の増減がみられるものの、とくに症例数に関する一定の推移傾向はみられなかった。また、厚生省の人口動態統計<sup>2)</sup>によって本邦の1972年から1976年までの5年間の各年における悪性喉頭腫瘍死亡者数を調査すると、それぞれ907例, 880例, 966例, 862例, 897例となり、1974年のみやや高い値を示していたものの、他はほぼ近似の値を示していた。

これら各年における死亡例に対する剖検率はそれぞれ9.4%, 6.3%, 7.6%, 7.7%, 9.4%となり、これらの平均剖検率は8.1%であった。これを他の臓器癌症例の剖検率、すなわち舌癌の10.7%<sup>6)</sup>、唾液腺癌の12.9%<sup>7)</sup>、咽頭癌の14.9%<sup>8)</sup>などと比較してみると、悪性喉頭腫瘍剖検率がかなり低い値を示していることがわかる。

著者らの集計した悪性喉頭腫瘍剖検例の男女比は、9.3:1と男性に圧倒的に多かった。このことは女性における喉頭癌発生頻度が男性の10%前後であるというこれまでの成績<sup>9)</sup>とはほぼ同じ割合であった。一般に悪性喉頭腫瘍の罹患率は男性の方が女性よりもはるかに高いが、女性の悪性喉頭腫瘍は増加の傾向にある<sup>3)</sup>とも

いわれている。しかし今回の著者らの集計した剖検例における検索の結果からは、女性の症例数が男性の症例数に比してはなほ少なかつたためか、これら症例数の増減に関する一定の推移傾向を掌握するには致らなかつた。

## 2. 悪性喉頭腫瘍剖検例の年代分布および平均年齢

悪性喉頭腫瘍患者の来院時の年齢はこれまで50歳代にピークがあつたが、最近60歳代に移行し、さらに70歳代以上の年代にも増加の傾向がみられる<sup>9)</sup>という。著者らの悪性喉頭腫瘍剖検例の集計では、60歳代で死亡した症例が144例(39.9%)と最も多く、死亡時の平均年齢は65.0歳(男性64.8歳, 女性66.5歳)であつた。

## 3. 悪性喉頭腫瘍の組織型別症例数と発生部位

著者らの集計した剖検例における組織型別症例数は、扁平上皮癌が318例(97.6%)と全症例のほとんどを占めていた。そのほかに未分化癌が2例, 基底細胞癌, 単純癌, 腺様嚢胞癌, 粘表皮癌, 硬癌および多形細胞肉腫が各1例ずつみられた。すなわち, 肉腫の1例を除いて全てがいわゆる癌腫であつた。このことは従来悪性喉頭腫瘍は組織学的に扁平上皮癌がほとんどである<sup>9)</sup>といわれていることと一致する。

著者らが輯報によって集計した剖検例には、原発部位の記載されてた症例は少なかつたが、原発部位の記載されてたもののみを集計した結果からでは声門上部が12例(48.0%)と最も多く、声門部が11例(44.0%)がこれにつき、声門下部が2例(8.0%)と少なくなつてた。声門上部は分泌物、食餌などの汚染に常にさらされ、括約作用の物理的影響と相俟つて理論的には発癌の機会が増加されるものと思われた。声門上部の汚染を増加する要因の一つに歯牙との関連があり、声門上部癌群では歯牙の欠損率が有意に高率であつた<sup>9)</sup>といわれる。また喫煙は悪性喉頭腫瘍発生に重要な因子である<sup>10)</sup>ともいわれている。著者らの集計した成績からは喫煙と悪性喉頭腫瘍の相関関係は見出しえなかつたが、従来の報告では喫煙量に比例して上皮化生が進展しているというものが多し。

また、人類特有とされる喉頭の重要な機能として音声に関する機能がある。そしてこの音声にかかわる機能の酷使は声帯に物理的な慢性刺激が加わることとなり、この刺激が長期に亘ると声帯上皮は単純肥厚からさらには種々の程度の異型上皮に変化する<sup>9)</sup>といわれる。

悪性喉頭腫瘍の予後を原発部位別にみると、声門部より発生したものの予後は喉頭癌中でもっともよく、声門下部癌は部位的な関係からその発見が遅れがちとなりやすいため、その予後は最も悪いといわれる<sup>11)</sup>。しかし著者らが集計した症例を分析した結果からみる限りにおいては、声門下部癌が79.5歳と最も高齢で死亡し、声門上部癌が最も若くして死亡してた。このような異つた結果を生じたことは、集計に使用した輯報に原発部位の記載症例が少なかつたことにも起因すると考えられ、今後さらには検討を要するものと思われた。

## 4. 悪性喉頭腫瘍剖検例における転移頻度

悪性喉頭腫瘍剖検例におけるリンパ節転移は、転移に関する記載のない43例を除いた320例中152例(47.5%)にみられ、このうち男性では285例中138例(48.4%)に、女性では34例中13例(38.2%)にみられた。リンパ節部位別における転移頻度は、頸部が最も高く、次いで気管周囲、肺門部、気管分岐部などであつたが、これらは従来から比較的転移頻度が高いとされている部位である。

臓器転移は同じく320例中228例(71.3%)にみられ、このうち男性は285例中205例(71.9%)、女性では34例中22例(64.7%)に認められた。これらの臓器転移の頻度は河辺<sup>12)</sup>の臨床的報告の値に比してはるかに高い数値を示してた。このことは著者らの集計した症例は剖検例であることから当然の成績ともいえる。また臓器転移症例を臓器別にその転移頻度をみると、肺が119例(52.2%)とほぼ半数を示め、次いで頸部、食道、甲状腺、肝、骨などが多く、その他舌癌<sup>6)</sup>、唾液腺癌<sup>7)</sup>などの症例において転移頻度が高いといわれている部位へ高率に転移してた。

### 5. 悪性喉頭腫瘍剖検例における重複癌

悪性喉頭腫瘍と他部位の癌との重複癌症例数は、著者らの集計した剖検例 363例中65例にみとめられ全症例の17.9%にもなっていた。この数値は臨地的見地より検索した河辺<sup>12)</sup>(1.6%)および佐藤<sup>10)</sup>(3.0%)らの成績に比較してはるかに高い値といえる。喉頭癌と重複した二重癌、三重癌をまとめてこれを臓器別にみると胃癌が19例で最も多く、次いで肺癌が16例、食道癌が8例で合計43例となり、上部消化管の癌と肺癌との重複がその大半を占めていた。またこれらの重複癌を性別的にその発生率を比較すると、男性では症例総数 326例中58例(17.8%)女性では症例総数35例中7例(20.0%)となり女性における重複癌症例の占める割合が男性におけるそれよりも高かった。また重複癌65例の死亡平均年齢は78.4歳となり比較的高齢であることも特徴であった。日常の診療にあたってはこれらの点にも留意すべきものと思われた。

### 6. 悪性喉頭腫瘍剖検例における副病変

悪性喉頭腫瘍剖検例における副病変の主なもの肺炎、肺鬱血および肺水腫、気管支炎などの呼吸器に関連した病変がその大半を占めていた。これらのことは、これまでもすでに指摘されている<sup>10)</sup>ことであり、患者の治療にあたっては常にこれらの合併症を併発しないようその予防に充分留意することが必要であろうと考える。なお、これらのほかに頸部血管破裂が22例(6.1%)もみられ、これが直接死因となっているものもあった。

## ま と め

日本病理剖検輯報(第15, 16, 17, 18, 19輯)

をもとに悪性喉頭腫瘍の剖検例 363例(男性 326例, 女性35例, 性別不明2例)を集計し、統計的に観察したところ、次の結果を得た。

1. 男女比は 9.3 : 1 と男性症例が圧倒的に多かった。

2. 剖検時の平均年齢は65.0歳(男性64.8歳女性66.5歳)であった。症例の年代分布では60歳代(39.9%)が最も多かった。

3. 組織型別の症例数では扁平上皮癌が 318例(97.6%)で症例のほとんどを占めていた。

4. 原発部位では声門上部が12例(48.0%)と最も多く、声門部が11例(44.0%)で、声門下部原発のものは2例(8.0%)と少なかった。原発部位別にみた死亡時の平均年齢は声門上部が60.3歳、声門部が67.2歳、声門下部が79.5歳となっていた。

5. 転移については臓器とリンパ節のいずれにも転移を認めた症例は 132例(41.3%)、臓器のみに転移がみられた症例は96例(30.0%)で、リンパ節にのみ転移のみられた症例は20例(6.2%)であった。

6. 悪性喉頭腫瘍と他臓器との重複癌症例は65例(二重癌60例, 三重癌5例)で、その平均年齢は78.4歳と高齢であった。

7. 副病変としては肺炎が最も多く、肺鬱血および肺水腫、気管支炎など、とくに呼吸器に関連するものがその大半を占めていた。また頸部血管破裂が22例(6.1%)もみられたことは、注目すべき所見であった。

ご校閲をいただいた教室主任鈴木鍾美教授に深謝致します。

本論文の要旨は第6回岩手医科大学歯学会総会で発表した。

**Abstract :** The authors studied a statistical survey of the autopsy cases of the malignant laryngeal tumor (MLT), which were collected from the annuals of the pathological autopsy cases in Japan during five years from 1972 to 1976, in order to examine the actual condition of the MLT in Japan.

The total number of 363 cases of the MLT (Male : 326, Female : 35, Unknown : 2) were revealed, and the average age of the cases was 65.0 years old (Male : 64.8, Female : 66.5). Histopathologically, 318 cases showed squamous cell carcinoma. About the age distribution at autopsy, 144 cases were in seventh decade. Multiple primary cancers affecting both the larynx and the other organs were found in 65 cases (double : 60, triple : 5).



文 献

- 1) MacComb, W.S. & Fletcher, G.H. : Cancer of the Head and Neck, The Williams & Wilkins Co., Baltimore, pp246-247, 1969.
- 2) 厚生省編：人口動態統計，下巻，1972-1976.
- 3) 佐藤武男：喉頭癌—その基礎と臨床—，金原出版，東京，38—45，1972.
- 4) 平山 雄：肺癌，疫学と予防，山村雄一，他，監修：新内科学大系28A，第一版，中山書店，東京，20-30，1977.
- 5) 日本病理学会編：日本病理剖検輯報，第15, 16, 17, 18, 19輯，杏林書院，東京.
- 6) 佐藤方信，野田三重子，畠山節子，竹下信義，守田裕啓，鈴木鍾美：日本病理剖検輯報に基づく舌癌剖検例の検討，口科誌，29 : 37-43, 1980.
- 7) 佐藤方信，野田三重子，畠山節子，竹下信義，守田裕啓，鈴木鍾美：日本病理剖検輯報に基づく唾液腺癌剖検例の統計的観察，日口外誌，26 : 691-699, 1980.
- 8) 守田裕啓，野田三重子，竹下信義，畠山節子，佐藤方信，鈴木鍾美：日本病理剖検輯報に基づく咽頭癌剖検例の統計的観察，岩医大歯誌，5 : 13-24, 1980.
- 9) 宮原 裕，前田和雄，山田康之，佐藤武男：喉頭癌の発癌の要因—歯牙衛生の検討—，耳鼻臨，68 : 69-74, 1975.
- 10) 佐藤武男：喉頭癌発生に影響を与える因子，日本臨床，27 : 169-181, 1969.
- 11) 佐藤秩子：呼吸器—腫瘍，赤崎兼義編：病理学各論 I，第7版，南山堂，東京，156-158, 1979.
- 12) 河辺義孝：剖検診断に基づいた耳鼻咽喉科領域悪性腫瘍の統計的観察，日耳鼻，96 : 1756-1767, 1966.